

群 教 七	C02 - 01
	平16.221集

# 群馬県中学校における儀式的行事「立志式」 の広がりと取組の実態に関する研究

- 昭和40年代初期に導入した実践校の取組を中心として -

特別研修員 茂野 勇 (前橋市立宮城中学校)

## 《研究の概要》

本研究は、群馬県中学校における儀式的行事「立志式」の実施状況や取組の実態を明らかにしようとしたものである。ここでは、昭和40年代初期に導入した実践校を中心に、群馬県における起源を探り、また群馬県下の国公立中学校176校に調査したアンケート結果から、「立志式」の広がりや取組の実態を調べた。

【キーワード：教育史 中学校 儀式的行事 立志式】

## 主題設定の理由

今日の生徒をめぐる状況を見ると、人間関係や連帯感の希薄化、集団や社会の一員としての自覚や規範意識の低下など、豊かな人間性をはぐくむべき時期の教育に様々な課題が生じている。これらの課題に適切に対応していくことが、これからの教育に求められている。

これらの課題解決の一つの方法として、学校行事の充実が考えられる。学校行事は、各学校の創意工夫の余地の広い教育活動であり、各学校の特色の形成に重要な役割を果たしており、生徒の学校生活の流れに望ましい変化をもたらし、学校生活に色彩を添え、折り目を付け、学校生活をより豊かなものにするという意義を有している。さらに、生徒が協力して活動することによって、成就感や充足感を味わい、望ましい校風を育て、連帯感を高めるなど、他の活動では得がたい教育的な意義をもっている。その内容の一つである儀式的行事においては、清新な気分が生徒の心を引き締めたり、学校生活の一つの区切り目としての新たな決意を盛り上げたりする。また様々な行事において、上級生と下級生とが協力して活動し、よりよい人間関係を育てることにもつながるなど教育効果が期待できる反面、形式化してしまったり、厳粛な雰囲気損なったりしてしまえば、教育効果はあまり期待できない。

群馬県下の国公立中学校176校に儀式的行事についてのアンケート調査を実施したところ、入学式、卒業式、始業式、終業式等は、全ての学校で実施されているが、「立志式」については、各校まちまちであることが分かった。そこで、中学2年生を対象にした儀式的行事「立志式」は、どのような目的で導入され、実施されてきたのか。また、群馬県中学校における儀式的行事「立志式」の起源と広がりを探り、各校の実施状況や取組をまとめ考察することで、「立志式」が果たす役割を明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

## 研究のねらい

群馬県中学校における儀式的行事「立志式」の起源と広がりを探り、各校の実施状況や取組をまとめ考察することで、「立志式」が果たす役割を明らかにする。

## 研究の方法

(社団法人)日本児童文芸家協会の資料から「十四歳立春式」の起源を明らかにする。昭和40年代初期に実施した学校を中心に調べ、本県において実施された背景を探る。群馬県下の国公立中学校176校に「立志式」に関するアンケート調査を実施する。アンケート調査から、「立志式」の実施状況や県内への広がり、取組をまとめ考察することで、「立志式」が果たす役割を明らかにする。

## 研究の内容

### 1 「立志式」の起源について

#### (1) 「十四歳立春式」の提唱

現代の元服式ともいふべき「十四歳立春式」は(社団法人)日本児童文芸家協会の提唱にかかると、**「自覚」「立志」「健康」**を目標に掲げて、14歳を迎えた少年少女たちに、14歳という年齢が個人的にも社会的にも重要な年齢であることを自覚してもらい、明るい祝祭を催し、希望を与え、前途を祝福し励ます行事のことである。

また、時期は季節的にもふさわしい2月の「立春の日」をあて、家庭行事・地域行事、やがては国民行事としたいと提唱している。

日本児童文芸家協会は、B六判七十余ページに及ぶ「十四歳立春式」の小冊子や式当日用のパンフレットを作り、広く各方面に配布、この運動の普及につとめた。

以下は、その中からの一部抄出である。

<p>&lt;趣旨&gt; わたしたち児童文学者は、当然その文学に関するものとして、今日の児童・少年少女の家庭・社会におかれている状態に強い関心を払っている。 さて、戦後のながい試練をへて、わが国はようやく復興し、国民はさらに前進への姿勢を示している。それは次の世代によって、さらに正しくうけつがねばならない。 しかるに、青少年の一部の現状は必ずしも明るい面ばかりでないことは、新聞記事や諸調査統計の示す通りであることは遺憾である。わたしたちは、ここに次の世代をうけつぐべき少年少女に、正しい指針を示し、明るい希望を与え、大きなげましを送るべきであろう。戦後、満二十歳を期して、「成人式」が全国に行われてきた。それはもとより意義のふかいもよおしである。 しかし、わたしたちは、それよりもなお若い年齢層に対しても、その年齢にふさわしい自覚を早くより持たせる必要があるのではないか。そのことを知っていた先人たちの知恵は、長く元服式をもよおしてきたが、それは明治維新と共に消滅してしまった。 わたしたちは、ここに、新しい目的と様式をもった現代の元服式ともいふべき「十四歳立春式」をあげることを提唱し、官民の賛意をえて、広く国民の年中行事としたい。 十四歳は、ほぼかつての元服の年齢であり、今は中学二、三年生に当る。彼等は義務教育の最後の年であり、ある者は進学し、ある者は、実社会に出る前である。そして社会的にも、自己の行動に責任のかかる年齢である。精神的にも、肉体的にも、もっとも重要な人生の出発点に当る年齢である。 それ故に、わたしたちは、積極的に、この「十四歳立春式」の意義を深く考え、この年に当る少年少女のために、明るい祝祭をもよおし、その前途を祝福し励ましてやりたいのである。</p>	<p>(日本児童文芸家協会の「十四歳立春式パンフレット」より写す)</p> <p>&lt;目標&gt; この目標として、次の三つのものをあげたい。 一、自覚 二、立志 三、健康 第一の自覚はもはやその年齢に到達し、社会への第一歩をふみだそうとしていることからくる自己の行動に自覚をもたせ、責任感をもつ意識を与えることである。 第二の立志は、将来の社会人としての高潔な人格の形成、社会のためになる職業の方向への道を考えさせることである。 第三の健康については、すべての事業は心身の健康にまつところが大きい。自分の心身を鍛練し、たくましい健康を保たせることである。</p> <p>&lt;時期&gt; 二月立春の日が季節的にもふさわしい。中学二年生の終りに近い頃である。</p> <p>&lt;式&gt; 家庭・・・十四歳の少年少女のある家庭では、肉親知己が集って、祝福してはげます。 地域・・・地域団体(婦人会、青年団等)或は学校行事として、明るい祝祭を催す。このやり方等は別に考える。</p> <p>日本児童文芸家協会はこの運動を提唱すると共に、新聞社、政府等にもこの運動の意義をみとめてもらい、ひろく児童文化諸団体、婦人団体等によびかけて実行へ運ぶ気運をもちあげると共に、出版活動や祝祭にふさわしい歌の作詞等を行いたい。</p>
---	---

このような「十四歳立春式」の提唱は各方面に大きな反響を呼び起こし、準備、広報期間が短かったのにもかかわらず、第一回の「十四歳立春式」(協会主催の中央式典)が昭和39年(1964年)2月5日東京新宿の伊勢丹ホールで開かれた。この催しは新聞、テレビ、その他報道機関に大きくとりあげられ、全国的に紹介された。以下は当時の新聞記事の一部である。

### 「十四歳立春式」の討論から

日本児童文芸家協会の主催する初の「十四歳立春式」が立春の日、東京・新宿の伊勢丹ホールで開かれた。父母のためのパネル・ディスカッション「十四歳少年少女の問題点」(司会は滑川道夫さん)で開幕したが、高校生の犯罪が世間の注目をあつめている折りから、各講師とも熱心にこの年齢の特徴や自覚の必要、家庭の心がけ、社会環境などについて意見をのべた。

四谷第二中学校長富田義雄さんは「稚心を去る」という言葉を紹介し「現在の親は子どもをかますぎる。もっと自分の足で責任をもって歩かせるよう。私は生徒を小さな紳士、小さな淑女として扱うことにしている」と独立心を強調する。

教育学からは立教大学教授山本晴雄さんが、非行少年の多くは十四歳が非行の準備期、そして十五歳でピークになり、十九歳でふたたびもとにもどるという過程をたどると、非行少年の調査結果を紹介し「イソップ物語が理解できるのは十四、五歳であり、読んだものにもっとも感銘をうけるのもこの年齢。それなのに周囲は勉強だけに関心をもち、りっぱな人間になるということをおろそかにしている」と警告。

<朝日新聞 1964(昭和39)年2月7日付>

このように「十四歳立春式」が提唱された時代的背景には、青少年の非行問題が大きく関わっていることが当時の資料から読み取ることができる。その後、各地で反響を呼び、全国的に広がっていった。愛媛県では、全県的行事としていち早く取り組み、「少年式」という名称で各中学校で実施した。また、神奈川県平塚市では同市をあげての行事として開催している。

この時の青少年問題協議会の調査によると、昭和43年末の実施校は、愛媛県237校、青森県12校、宮城県8校、岩手、群馬両県6校など、430校に達している。

## (2) 本県における起源

昭和40年9月4日に下仁田町立下仁田中学校で「成人としての自覚を促し、将来の心構えをもたせるため」2年生を対象に“立志式”を行ったのが、本県における起源である。

以下は当時の新聞記事の一部である。

### もめる下仁田中の“立志式”

現代版の元服式だ 時代に逆行すると非難

甘楽郡下仁田町立下仁田中(吉田金蔵校長)は、ことしから学校行事の一つとして「成人としての自覚を促し、将来の心構えをもたせるため」2年生を対象に県下初の“立志式”を行なうことになったが、一部町民の間に「現代版“元服式”のにおいがする」と時代逆行を心配する声があがっている。この式次第について県教組甘楽支部では学校側のネライにいちおう賛成しているが、式典を逆用されては困るとして四日、同中で行なわれる“立志式”の成り行きを注目している。

この“立志式”というのは身体、精神的にアンバランスな時期にある中学2年生におとなとしての自覚をもたせ、将来、自分がどの方向に進むか、はっきり見いださせるのがおもなネライである。同時に年々増加している青少年の非行犯から中学生を守ろうというもの。

同式は、吉田同中校長が発案、これまでにも数回、計画を同中PTA全員委員会や職員会議にかけ、討議した結果、大部分が賛成なので実施に踏み切ったという。

四日午後一時から開かれる同式典には2年生百四十七人のほか、職員や父兄多数が出席し、国歌斉唱、学校長式辞、記念品贈呈、同中バンド演奏、地元父兄有志の講演、児童の書いた「十四歳に思う」という作文朗読など行なわれるが、時代逆行的なものも見当たらず、ごくありふれた内容。毎年秋(式の日は不定)に行なうという。

しかし、この式典に批判的な人たちは「昔、武士は数え十六歳になると元服式を行なった。こんどの“立志式”の目標はたいへん結構なことだが、誤った方向に進めば時代逆行にもなりかねない。また、式典を行なうことで学校側のネライが達成されるか疑問だ」としている。

#### 黒沢副同中教頭の話

一年の入学式、三年の卒業式と一、三年生はそれぞれの時期に緊張感もあるが、2年生にはこのような行事がなく、精神的にも中だるみといった状態だ。元服と似かよっているという批判の声もあるようだ、このような点を考え、趣旨をよくみてもらえればじゅうぶん納得してもらえはすだ。

<東京新聞 1965(昭和40)年9月3日付>



昭和40年9月に県下で初めて「立志式」を実施した下仁田中学校は、その翌年の昭和41年4月1日に旧下仁田中学校、馬山中学校、青倉中学校、小坂中学校の四校が統合され下仁田東中学校になった。下仁田中学校で「立志式」を実施した吉田金蔵校長は、そのまま統合された下仁田東中学校の初代校長になられた。

以下は、吉田校長に当時の様子について聞き取り調査をした内容である。

そのころ、立志式をやりたい、始めたいという声は、東毛地区を中心に広がり始めていたが、実際に始めたという情報はなかった。下仁田では統合中学校の発足を契機に、ぜひ、という声が高まり、実施の運びとなったと記憶している。中学2年生を主人公とし、大人となる第一歩としての自覚や決意を促していこうと、全員に「立志式を迎えて」というような題で作文を書かせ、自立、立志の大切さを自覚し、困難に立ち向かっていく勇気、夢や希望などを改めて考えさせるよい機会となっていったように記憶している。その後、近隣の中学校にも広がり、保護者や地域の人々の参加も得るようになり、やがて、中学校の一大年中行事となっていた。また、中学校の卒業生で活躍している人々の記念講演(講話)などを盛り込む学校も増え、しだいに充実してきたように記憶している。

下仁田東中学校は当時県下でいちばん大きな統合校となり、名実ともに県下に誇れる中学校にしようと、当時の町長以下、多くの町民の期待の中学校であったようだ。

県下で初めて実施された「立志式」は、全国的にも貴重な行事として各新聞に紹介され、その後県下の中学校に広まっていった。

## 2 「立志式」の県内への広がりについて

### (1) 昭和40年代初期の様子

群馬県では、昭和40年9月4日に下仁田中学校が「立志式」を実施した後、昭和41年2月3日に桐生市立南中学校（石川一善校長）が「立志式」を、昭和41年2月4日に新里中学校（飯島保校長）が「立春式」を、昭和42年には、桐生市立南中学校から桐生市立北中学校に転任した石川一善校長が「立志式」を行うなど徐々に広がっていった。以下は、昭和43年に新聞で紹介された桐生市立北中学校の「立志式」の記事である。

### 大志抱けと“立志式”

“元服”にならって 多感な少年時代に自覚を

十四、五歳を迎えた中学生たちに、昔の“元服”にならった記念の式を行なう学校がふえているが、ことは桐生市と勢多郡新里村などで、“立志式”“立春式”と名づけた行事が今年初めに予定されている。「少年よ、希望を持ってたくましく生きよ」と励ましと祝福を贈ろうと意義ある催しが計画されているが、ある校長先生は自ら筆をとって生徒一人一人に贈る人生訓を短ざくに書きつけている。

桐生北中 人生訓を短ざくに


桐生市立北中(石川一善校長)では、今春同校を卒業していく三年生を対象に三日午前十時から同校で“立志式”を行なう。

この式は石川校長が市立南中の校長をしていた三年前に「十四、五歳の少年時代は精神的にもいちばん不安定なときだ。そんなとき本人に自分の考えや行動に自覚をもたせ将来への志を立てさせたら、こどもたちもわき道へそれるようなことはないのではないか」と思い立ってはじめてのが最初。父兄や生徒の間で好評だったことから北中へ移ってから実施しているもので、同校ではことが二回目。

昨年は卒業生への記念品もワッペンだけだったが、同校長はもっと心に残るものと考えたすえ、短ざく一枚一枚に自分の体験から得た人生訓を書いて贈ることを思いついた。一月にはいってから毎日、二百七人の三年生全員のために帰宅後コツコツと書きつけた。短ざくには「人生は航海なり」「真実を捨てて己れなし」など同校長が体験からえて作った約十種類の人生訓が書かれている。

また、この話をきいた一、二年生たちは「ぼくたち、私たちも、お世話になった先輩たちにお返しを」と短ざく掛けを贈ることになり、工作の時間を利用してスギ板で作りあげた。当日はこの二つの記念品が三年生に手渡され、学校ぐるみで祝福する。

<産経新聞 1968(昭和43)年2月2日付>




また昭和43年5月に、石川一善校長は日々の教師としての反省を書きつけた手記「杉っ子人生」を出版している。その中に立志式について触れられている箇所が以下である。

(「杉っ子人生」学校長16年の随想より抜粋)

### 中学教育へのささやかな願い

ここ三年来、中学三年生を(二年生でもよい。)対象に立志式を実施している。昔の元服式の復活かということで理解もされず反対の声もあった。しかし漸くわかってもらえるようになって実施している。ことしも北中学校創立二十周年記念事業の一つに加えてもらい委員会の協力をえて実施できたことは嬉しい。人は生まれて幼年時代七五三を家庭で祝福され、二十才になれば国家的に成人の日として祝福されている。七・五・三から二十才まで、この間が長く又最も動揺しやすいのが、青年前期の中学生の時代である。この機会に将来を見つめ、しっかりした志を立て、明かるく健康で出発してもらおうのである。二十才になってからは遅いのである。精神的支柱をこの時代に明確にしたいのが願いだ。祝福するにも生涯の思い出に残るようにと思い、短冊、ひとりひとり処生訓のような言葉を下手な文字で早期起き出しは恥を忍びながら記念に書いてあげた。中学生時代を楽しく一方には精神的支柱をもってもらいたい二つの力点である。まあこんな方法もかた長い目で温かく見守っていただきたい。



### (2) 「立志の日」の提唱

群馬県でも「立志式」の実施が徐々に広がりつつある中で、昭和40年9月に行われた中央青少年問題協議会意見具申「青少年非行対策に関する意見」等を契機として、国民の総力を結集した運動の必要性が認識され、同年11月、閣議で国民運動の展開が提唱された。こうした動きを受け、国民の総意を結集した青少年育成国民運動の推進母体として、昭和41年5月に(社団法人)青少年育成国民会議が発足した。

- 4 -

そして、日本児童文芸家協会が「少年たちに社会人としての自覚を促す機会として『立春式』を開催すること」を提唱したのをきっかけに、各地で14歳の子どもたちを激励し、祝福する記念日として広がったものが「立志の日」である。

少年期から青年期への移行期として人格形成の上で極めて大切な年ごろに、自分自身の存在とその将来をかけたがないものとして受けとめる意識が子どもたちに育つことを願って、青少年育成国民会議では少年少女を激励する特別の日として、昭和45年度から国民運動にとりあげ、全国的な運動として「立志の日」の推進を全国に呼びかけてきた。本県においても、青少年育成国民会議に呼応して、昭和45年度より活動方針に取りあげ、県下全市町村で実施されるよう提唱してきた。「立志の日」設定の背景と意義について群馬県青少年育成推進会議の資料に、次のように書かれている。

(1) 教育的観点から (群馬県青少年育成推進会議資料より写す)  
 14才という年齢は、少年期から脱皮して、青年期に入ろうとする最も不安定な時期である。しかも心身のアンバランスが抵抗行動として表われたり、また、内面的に複雑な問題が沈潜して、うっ積する孤独な時期でもある。この時期において、人生への希望、人間としての自覚や自己の健康管理に心がけさせることが、将来自制心を養う契機となるものである。  
 このように、心身ともにおとなになる重要な関門として、みんなで力づけを必要とする最も大切な時期に当たっている。

(2) 社会的観点から  
 児童憲章は、児童は人として尊ばれるとうたわれているが、現代の日本社会は、これが家庭社会でも極めて冷淡である。地域社会では不良化という疑心の眼が光り、家庭では、学歴偏重の硬直的な考えから一步も出ていないために、中学時代の悩み深い青春前期の人間としての自覚、特に社会の一員としての自覚を与えるような心構えもなく、ただ進学の本虫となることのみ注意が集まっている。その意味において、少年、少女をとりまく社会環境は極めて粗悪であるというべきである。  
 家庭においても、社会においても、個人としての自覚と希望、社会人としての自覚と貢献度について、ひとつの契機を与えるべきであろう。

また以下の資料は、群馬県青少年育成推進会議が、「立志の日」の実施要項例として県下全市町村に配布した資料である。

<p>1 提 唱 群馬県青少年育成推進会議</p> <p>2 趣 旨 中学三年になる少年・少女が、みずから将来にのぞんで志を立て、次代の社会をになうものとしての誇りと自覚、さらにこれを実践するための健全な心身をつくり青年への新しいスタートに立つ日を「立志の日」として、県民こぞって14才の少年・少女を祝い励ますものである。</p> <p>3 目 標</p> <p>(1)自 覚 14才になれば、法律上刑事責任能力があると認められる。このことは、青年への第一歩を踏み出したことを意味する。良識ある社会人となるためにも、自己の行動について責任をもつようにする。</p> <p>(2)立 志 義務教育もおわりに近く、進学に、実社会にと、その進路を決定すべき重大な時期である。自己の特性を生かし、社会に貢献できるように、将来の方向を見出しそれを決定する。</p> <p>(3)健 康 心身ともに急速に成長発達していく時期である。規律と節度のある生活に心がけ、美しくたくましい心とからだをつくる。</p> <p>(4)期 日 市町村で決定する。</p>	<p>(5)対 象 中学三年を迎える少年・少女</p> <p>(6)実施事項 青少年育成関係機関および団体等が中心となり上記による趣旨、目標等を参考に、地域行事として地域に即した式典あるいは、それにふさわしい行事を創案する。また、家庭内における行事や、その後の少年少女に対する接し方など、地域社会、家庭全部が祝福激励するよう総合的に立案する。</p> <p>(実施例)</p> <p>記念行事類 文集発行、体力テスト、記念植樹、スポーツ大会、記念品の贈呈、記念撮影、親子座談会、社会奉仕、意見発表など</p> <p>式 典 励ましのことば…先輩などのなかから 記念講演…実業家、教育者などから アトラクション…音楽会、映画会、発表会など</p> <p>家庭行事類 親と子の話し合い 赤飯などの祝いぜん</p> <p>なお、行事の実施にあたっては、少年、少女が自覚と誇りを高め感銘深いものとなるよう配慮する。</p> <p>(群馬県青少年育成推進会議資料より写す)</p>
---	---

このように、群馬県青少年育成推進会議総会の資料（事業報告、事業計画等）を紐解いてみると、昭和45年度から青少推の重点目標として、「立志の日（少年の日）運動を広げる」等の記載があり、昭和50年度の10周年記念大会の「事業計画」までは活動目標の一つとして記されている。昭和51年度の総会資料からはその文言は見あたらず、どちらかと言うと、以後は「少年の日」（毎月第1土曜日）と「家庭の日」（毎月第1日曜日）の啓発運動が、「立志の日」に変わって展開されていったようである。

### (3) 学習指導要領との関連

青少年育成国民会議が昭和45年度から国民運動に取り上げ、全国的な運動として「立志の日」の推進を全国に呼びかけてきた結果、全国的に「立志式」「立春式」の広がりが見られる。

学習指導要領との関連では、昭和43年度の第3次学習指導要領改訂の中学校指導書の中には、まだ儀式的行事として「立志式」の例示は取り上げられていないが、昭和52年度の第4次学習指導要領改訂の中学校指導書の中から、儀式的行事の例示の中に「立志式」が盛り込まれるようになった。

中学校指導書<特別活動編>昭和45年5月より抜粋  
学校行事の内容とその取り扱い上の留意点  
(1) 儀式的行事  
儀式的行事には、国民の祝日における儀式、開校記念日における儀式、入学式、卒業式、始業式、終業式、朝会などが考えられる。

中学校指導書<特別活動編>昭和53年5月より抜粋  
学校行事の具体的な内容  
(1) 儀式的行事  
儀式的行事には、国民の祝日における儀式、開校記念日における儀式、入学式、卒業式、始業式、終業式、立志式などが考えられる。

### (4) 県内への広まり

以上のように、(1)(2)(3)で述べてきた国(県)の動向を含め、「立志式」の県内への広がりをアンケート調査(平成16年6月実施)によりまとめたのが下の表である。

年代	国(県)の動向	県内への広がり	年代	国(県)の動向	県内への広がり
S38	日本児童文芸家協会の提唱		S52	第4次学習指導要領改訂	S52 川場
S39.2.5	第1回「14歳立春式」 (東京・新宿)	S40 下仁田(9.4)	S54		S54 太田北 太田南
S41.5	青少年育成国民会議の発足	S41 桐生南(2.3)新里(2.4)	S56		S56 尾島(2.4)
S43	第3次学習指導要領改訂	S42 桐生北(2.3~S51)			大胡(2.23)
		S43 伊勢崎南(現一中)(3.4)	S60		S60 邑楽(2.4)
S45	群馬県「立志の日」 推進始まる	S45 北橋、館林三(3.2)	S61		S61 甘楽三 城西 館林四
		S46 板倉 粕川(2.4)	S62		S62 大泉西 富岡南
		S47 群馬中央(2.15)箕郷	H1	第5次学習指導要領改訂	H1 城東(~H14)南牧
		S48 白沢(2.6)富岡西 榛名	H4.9	学校週休2日制開始 (第2土曜日休業日)	H1 玉村南(~H11)
		S49 富岡(3.7)	H7.4	隔週5日制開始 (第2・4土曜日休業日)	H2 太田旭 宮城(3.22)
		S50 妙義(2.)	H10	第6次学習指導要領改訂	H4 沼田東
		S51 太田東(~H7)木崎(2.6)	H14	完全学校週5日制開始	H6 黒保根(2.4)
					H8 小野上(11.)
					H9 笠懸南 子持(11.22)
					H13 大間々東

学校名の後の( )は実施月日を示す。

## 3 群馬県中学校の「立志式」の取組について

### (1) 県内中学校の実施状況(平成16年6月アンケート調査による)

実施している学校・・・55校  
 <立志式 45校>  
 前橋七 太田西 太田北 太田南 休泊 城西 旭 館林一 館林二 館林三  
 館林四 多々良 沼田東 富岡 富岡東 富岡西 富岡北 富岡南 白沢  
 川場 榛名 箕郷 群馬中央 群馬南 子持 小野上 大胡 粕川 妙義  
 下仁田 南牧 磐戸 甘楽一 甘楽二 甘楽三 尾島 木崎 生品 綿打  
 藪塚本町 笠懸南 板倉 千代田 邑楽 邑楽南  
 <立志の祝い 1校> 桐生南 <立志の集い 2校> 大間々東 黒保根  
 <立春式 4校> 新里 明和 大泉南 大泉北  
 <立春の日記念行事 1校> 大泉西  
 <啓発式 1校> 北橋 <立翔式 1校> 宮城  
 実施していない学校・・・113校  
 以前は実施していた学校・・・8校  
 桐生北 伊勢崎一 太田東 城東 富士見 赤城南 玉村南 吾妻原町

現在実施している学校は、左表に示されているように群馬県下の国公立中学校176校中55校で31%の割合である。名称については、学習指導要領の例示にもある「立志式」が45校で82%、日本児童文芸家協会が提唱した「立春式」が4校で7%である。特徴のある名称としては、北橋中学校の「啓発式」や宮城中学校の「立翔式」がある。「啓発式」の名称は、橋本左内が15歳の時に著した「啓発録」にちなんでいる。「立翔式」の名称は、学校独自で考えてつけた造語である。

平成になり、学校週5日制が導入され、授業時数確保の問題から行事の精選が行われる中、「立志式」を取りやめる学校も出始めてきた。その逆に隔週5日制が実施されてから新たに取入れたのは、創立50周年事業の一つとして平成8年度から始めた小野上中学校。進路学習の一環で、村が主催し3年生を対象に平成9年度から始めた子持中学校。そして学校評価に対するアンケートの中の保護者からの要望で平成13年度から始めた大間々東中学校などがある。

## (2) 県内中学校の取組内容

取組内容で多いのが、「立志の誓い」などの決意発表や作文発表で44校。その作文を立志の塔などに格納しているのが9校。式典の後に「記念講演」を実施しているのは30校。クラス合唱や学年合唱は、9校。中でも群馬町立中央中学校では、立志式用の歌「14歳の季節」を作り、学年合唱している。「親から子への手紙」は、3校。その他、特色ある内容を取り上げてみると、太田市立西中学校では、地域を知る活動として「七福神巡り」を実施し、地元の寺社巡りをしている。館林市立第二中学校では、立志の活動として「地域清掃」のボランティア活動を取り入れている。沼田東中学校では、「親子記念文集」や「染抜き手拭い」を作成し、記念品として贈っている。中学校の節目として、1年生の入学式、3年生の卒業式とならんで、2年の立志式を位置づけ、この立志式を機会に、自己の進路、生き方を見つめることは、たいへん意義深いことである。また、ともすると目標を見失いがちになる2年生の時期に、厳粛な式の中で地域の方々や保護者・在校生などに祝福され、喜びを分かち合えることは、集団や社会の一員としての連帯感がはぐくまれ、学校生活をより有意義なものへ導く大切な儀式的行事だと思う。また、粕川中学校や新里中学校のように、記念講演を生徒自身で運営するなど工夫をしている学校もある。このようにできる限り生徒にいろいろな役割を分担させ、使命感や責任感の重要性についての自覚を深める機会を与えることは、行事への積極的な活動の意欲を高める効果がある。ぜひ、今後各中学校で参考にして取り入れていきたい点である。

## (3) 「立志式」にかかわる卒業後における行事の取組

「立志式」で書いた作文を立志の塔などに格納し、成人式の日に返却している学校が9校ある。白沢中学校では、成人式の後に立志の塔に集まり、作文（コピー）を配布し、もう一度格納して40歳になったときに、代表が取り出し同窓会や学年会で配布している。

また板倉中学校では、「二十歳の自分へ」というメッセージカードを書き、タイムカプセルに入れ、教育委員会が保管し、成人式のときに返却している。

群馬県でいち早く「立春式」を実施した新里中学校では、「立志式」にかかわる卒業後における行事として、卒業してから25年後に「立志の塔に集う会」を平成3年度から行っている。

平成5年度に、新里中学校で「立志の塔に集う会」を「立春式」と合同開催された代表者の一人であるSさんにお聞きした内容が以下である。

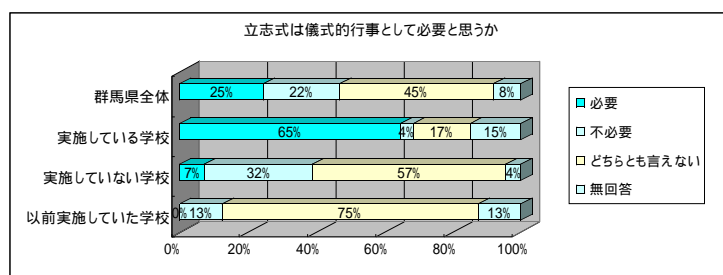
とにかく、何か志を立てる必要があると思った記憶があります。先のことなどあまり考えずに生活していたのでいいきっかけになったと思います。その通りになるかならないかは別として考える機会は多ければ多いほどいいと思います。学校という場が生徒に自分を見つけるチャンスを与えることが大切だという意味で立春式の意義は大きいと思います。

お金もなくお金を集める力も気力もなかったことで中学生と一緒に式典を行わせていただきました。中学校にはご迷惑をおかけしたと思いますが、わたしたちには、よい思い出となりました。40歳になったら再会するのだということが中学生に現実のものとして受け止められたら、その時をめぐして生活しようと思ってくれる子もいるのではないのでしょうか。

わたし自身は、26年前の志とあまり変わらない職業についていましたが、実は結果的にそうだっただけのことだと気づいて、もう一度自分さがしをするきっかけになりました。そして今、新たに志を立て、残りの人生のために「学生」をしています。卒業とその後の就職を目指して勉強中です。何度もいるんなきっかけを立春式にもらっています。

この取組は県下でも珍しく、今後同じような取組を予定しているのは、卒業してから15年後に「集う会」を計画している宮城中学校と小野上中学校の2校だけである。

## (4) 立志式についてのアンケートから（平成16年6月アンケート調査による）



「立志式は儀式的行事として必要と思うか」というアンケート調査から明らかになったことは、群馬県全体では25%が「必要」、22%が「不必要」、45%が「どちらとも言えない」という結果であった。

さらに、実施している学校、実施していない学校等分類してみると、実施している学校の65%が「必要」と答えており、各学校が創意工夫を生かし、特色ある行事の柱として位置づけ継続実施していることが分かった。以下は必要とする主な理由である。

・自覚を促すという点で有用だと思う。特に中学2年生という子どもと大人の境目で精神的にも不安定になりかねない年齢のときに自分の意志を確認することに重要な意味を感じます。  
・自己を見つめ、将来どんな人間としてあるべきなのかを、儀式を通して体感させることは、現代の生徒には不可欠だと思う。  
・1年生には入学式、3年生には卒業式、そして中だるみになりがちな2年生には立志式を開催し、将来に対する夢や希望を持たせるとともに今までを振り返って、保護者や地域の人々に感謝の念を抱くことは有意義である。

実施していない学校の32%が「不必要」と答えており、主な理由は以下である。

・授業時数との兼ね合いから、必要な行事とは思えない。  
・立志式の意義を認めていないわけではないが、学活等で、担任が話をする程度でよいと思う。それ以上に、世間では授業時数の確保が叫ばれており、できる限り行事を組まない規模縮小が図られている。

また、実施していない学校の57%、以前実施していた学校の74%が「どちらとも言えない」と答えており、主な理由は以下である。

・学力をつけるために授業時間を確実に確保するために、行事等を精選している中で、新たに立志式を行うことは難しい。  
・中学2年生の実態を考えると、一つの節目として効果的な面もあると思う。一方で、15～17年度の授業日数不足に伴う最低時数の確保から、行事精選の対象となってしまうことも考えられる。

理由を分析してみると、「立志式」の意義や目的には理解を示しているものの、授業時数確保の問題が実施に向け大きな課題となっていることがうかがえる。今後、学校行事を見直し・精選していく中で、3年間を見通した系統性や発展性、教科指導等の関連から、他の行事に「立志式」のねらいや内容を活動として取り込み統合するような工夫も必要ではないかと考える。

#### 研究のまとめと今後の課題

研究の結果、「立志式」が果たす役割について、次のようなことが明らかになった。

14歳という節目に、志を立てることの意義について考えさせ、自らの将来の生き方にかかわる自覚と意欲を高めさせることができる。これまでの自分を振り返らせるとともに、これからの自己実現に向け、内省心や向上心を培い、前向きに生きていこうとする態度を育てる。また、法的にも大人としての立場を理解することで社会の一員としての自覚を深めることができる節目の行事である。

今後の課題としては、昭和40年、下仁田中学校の実施を契機として、徐々に県下中学校に広まってきた「立志式」だが、実施率は栃木県（実施率98%）に比べると低い。その要因について、十分な検討を加えることができなかった。

今後更に、「立志式」を進路指導の一環として行われてきた職業体験学習ととらえ直して、新たに生き方学習としての総合的な学習として実践している長野県の中学校や、今まで市の行政が主導となって行ってきた「立志式」を市と学校が話し合いをし、生徒たちによる自主企画の「立志式」に変えた石川県羽咋市の取組など、全国的な取組についても研究を進めていきたいと考えている。

#### 参考資料

- ・ 社団法人 日本児童文芸家協会 「創立四十周年記念誌」
- ・ 社団法人 日本児童文芸家協会 「十四歳立春式パンフレット」
- ・ 石川 一善 著 『杉っ子人生 学校長16年の随想』 桐生市教育会(1968)
- ・ 「群馬県青少年育成推進会議 昭和42年度通常総会資料」